

になるだろう。時代の流れに敏感な若者がとびついても不思議はない。

ただし芸術という世界は、商業主義を絶対に拒絶するものが、むしろ一番商業主義に適合し、すぐれた商品になるという逆説的な一面をもつ事を、忘れてはならないと思う。その事は「異色の近代画家たち」が何よりも雄弁に語っていると思う。

(文学部教授・美学史)

シカゴでの思い出

浦谷 道三

戦前、戦中、戦後と七年余住みなれたシカゴでの思い出は尽きない。忘れられない事件が数多くあり、忘れられない人がたくさんいたものである。その内の二つ三つを書きしるして随想としたい。

FBI局員との出会い——

有名なFBIすなわち米国の連邦検察局の局員二人が当時文字通り敵国人であった私の部屋をノックしてはいつて来たのは昭和十九年六月十二日(月)の事であった。

シカゴ神学校の寄宿舎の一室であった。約二時間半にわたり室内にある私物を徹底的に検閲、その中で祖国の先輩、友人から餞別に貰った署名いりの国旗をはじめ、軍刀づきの人物写真、教育勅語の英文の写し等等役らの神経を刺激するような物を中箱三つにつめ込み、「必要な時にはまた電話する」と言い残して去って行った姿はいまだに忘れられない。その後、同月十七日、二十二日と二回にわたり召喚され、色々な尋問にあずかった。三時間の長きにわたるもので、質問の中で、(一)日本で学校が火事の場合何を最初に持ち出すかと尋ねられたので、「真影、国旗、それに教育勅語の巻物」と答えたら、二人はちよつと驚いたようであった。何しろ愛国精神にづらなるものであり、当時ご真影と言われた天皇皇后両陛下の写真を除いては、火急の場合、直ちに持ち出す二つのものを持っていたからである。(二)また、日本政府から送金を受けた事はないか、日本政府関係の者に手紙を出した事はないか等の質問を矢つぎばやに投げかけて鋭く迫ってきたが、結局第三回

蔦の炎

麻田 冲人

△昭8大経卒・会社重役▽

蔦の炎厓に一縷の血を滴らす
サルビアの鮮烈朝の牛乳欲る
蠶螂の分別風に逆はず

蠶螂の見えざる風に身を構え

秋暑し喪章の蝶の翅も萎え

秋風や腕の喪章の空解けて

怵ふ術なく花零す雨の萩

萩瘦せて花の重さを持て余す

声のなき叫喚風に耐えて萩

未晒のパン香ぐはしき今朝の秋

朴落葉地に届くとき力抜き

金輪際巖に縋りて蔦枯るゝ

水上バス子のバスケット蟬鳴かせ

落ちる林檎
宝 讓

△昭4大英卒・無職▽

農村の小道はびしょびしょに濡れ

林檎園にはいたるところに

林檎が落ちていた。

稲は黄色に倒れ伏して

稗がはびこっている。

陰鬱な雑草の小道をふんでゆくと

小雨に濡れて

阿武隈川がひっそり流れている。

米寿の老女の住む農家が

雨の中にびっしり濡れている。

このひとは老耄の忘却の中に

赤い着物で坐っている。

村の話はつきることもなく

生活の苦渋のにじむ顔で

村びとは働らいて生きて

かくて

忘却の中に流れてゆく 老残の

赤い着物に

何のためらいがあろう。

村びとの坐る畳の上に

ひそやかにうづくまる平安。

雨が降りつづいている

農村をびっしり濡らして――。

小雨にぬれて阿武隈は流れつづける。

小雨にぬれて林檎は落ちつづける。

落ちてゆく赤い林檎の実よ。

いかに時代に歩調を合せるためとは言え、余りにも古都の自然、また歴史が、産業化等という名のもとに荒されているが、もつと京都の匂いのこつた箇所が守られていいのではないかと。一つの例としていえることに余りにも山道などを舗装しすぎはしないか、これによつて雨水が地下に吸収されず、地下水が少なくなり、樹木は衰える、井戸水は出なくなる等の障害が起こるのではないだろうか。言いかえればもつと土というものにわれわれが関心をもつていいのではないだろうか。幼ない頃、土でこねたまんじゅうでまっくらになりながら、外で遊んだことなど、こんな状況を説明しても判らない子供たちがもうじき出てくるのではないだろうか。その反面三十代のものが二十年もすれば土のないアパート住いが味気なく、庭木の植えられる住宅が欲しくなるだろう。幸い、私は土がなくてはならぬ茶庭のあるところに住んでいる。また多くの方々が庭を眺め、心のうらおいを取り戻してをられる姿をよくみかけ、この辺でもう一度土の良さを考えて、変に文化的になりすぎた不具のような人間